



ドラッカー、コトラー、ポーターの CSR

もし新入社員がドラッカーとコトラーとポーターを
いっぺんに読んだら

Drucker : By permission of The Drucker Institute at Claremont Graduate University. Kotler © Bloomberg/Getty Images Porter © Bloomberg/Getty Images

南田みどりは今年4月、大手商社の二井物産に入社した。大学時代、発展途上国の貧困問題に目覚め、社会人になってからもCSR（企業の社会的責任）活動をするのが夢だった。だが、入社式で渡された辞令は「リテール本部営業3課」。全国スーパーに肌着やタオルなど日用品を卸す仕事だった。

（編集長 森 恵

編集協力：金田晃一（武田薬品工業株式会社）、小池勝也（株式会社アットバス代表取締役）

「藤井さん、約束が違うじゃないですか。CSRをやってくれって言ってくれたじゃないですか」

本社講堂の外廊下で人事部長の藤井二郎の大きな背中を見つけると、みどりは辞令を入れたバインダーを胸に抱えながら、小走りで駆け寄った。

その声に振り返った藤井は、思いのほか明るい笑顔で、みどりの肩をポンとたたきながら、こう言い放った。「まあ、人生は長いんだよ。お前も商社の一員として、まずモノを売る苦労を味わってみろ。それからでもCSRに行くのは遅くない」。

「でも部長、私にはCSRでやりたいことが山のようにあるんです」。みどりの大きな目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「営業にいてもCSRの勉強はできる。若いうちに、たくさん本を読んでおけ」

藤井は、みどりの目を真剣に見つめると、諭すようにこう言った。藤井の瞳の奥に、優しさと同時に厳しさを感じたみどりは、小さな声で「有難うございます。頑張ります」としか言えず、ペコリと頭を下げた。「ちょっと待て」。藤井はみどりを呼び止めると、自分の手帳から白紙のページを破って、何やらカタカナの名前を書き込み、みどりに手渡した。

◆

リテール本部営業3課は、たくさんの課題を抱えた部署だった。ここ数年の不況でスーパーは大量出店している低価格専門店との競争に明け暮れ、

今まで1980円で売れていたTシャツも、980円、780円と対抗値下げをせざるを得なかった。

課別の営業収支もここ3年は赤字。しかも赤字額は膨らんでいく一方だ。課長の兼松佳夫は「売り上げを増やせ、利益を上げる」と毎日発破をかけていたが、芳しくない状況が続いていた。

入社して一週間後。居酒屋で開かれた歓迎会で、みどりは課長の横に座らされた。課で唯一の新入社員だったからだ。祝杯を挙げた後、みどりは兼松に「お前はこの会社で何がやりたいんだ」と聞かれ、こう答えた。「地球の人口69億人のうち、10億人が1日1ドル以下で暮らしています。私は、この人たちが

に何かをしてあげたいんです。商社は世界中と取引しています。だから何か貢献できるでしょう？」

兼松は、苦虫を噛み潰したような顔をして、みどりの目を見ずにつぶやいた。「だってお前、いま会社や俺たちの部署が置かれている状況を知っているのか。会社は利益を出してなんぼだぞ。それに、ミルトン・フリードマンがこう書いているのを知らないのか」

「企業の社会的責任は一つしかない。それは利潤を増大させることである。企業の社会的責任と称して経営者が独断で慈善事業などに寄付したりするのは企業のオーナーである株主に対する一種の背任行為ですらある」。（*1）

「ミルトンって、誰ですか。そんなことを言っている学者がいるんですか」。みどりは思わず叫びそうになりながら、ぐっとこらえて、心の中でつぶやいた。「お前、ノーベル賞経済学者のフリードマンも知らないで、偉そうなことを言うなよ。企業は

*1 『資本主義の自由』（ミルトン・フリードマン著、マクロウヒル好学社）